

イエスは理解できないようなことを言っている。それが弟子たちの非難の声です。「こんな話」とは53～56節です。イエスが自身の肉を「まことの食べ物」、自身の血を「まことの飲み物」と言い、54節の言葉に、弟子たちの中の多くの者がつまづくのです。自分の理解力に頼って進んでいった弟子たちは、それ故に、挫折してイエスの下から離れ去って行ってしまったのです。このイエスの記事は、紀元1世紀末の頃のヨハネ共同体の状況が重ね合わされて描かれている、と思われまます。イエスにつくのか、それともその元から去っていくのか、厳しく問われていた時でした。このような共同体の状況を思いますと、ここで問われていることは、私たち一人一人が神さまによって招かれているかどうか悩んだり、そのことで躓いたりする、という話ではないのではないのです。去っていった弟子たちは神さまに招かれていたのに、その招きを拒んだのです。心を頑なにし、誰がこんな話を聞いていられようか、と言って去っていったのです。この福音書では、「罪」とはイエスを拒否すること、神さまを拒否する事なのです。イエスは十二人の弟子たちに向かって「あなたがたも離れて行きたいか」と問いかけます。その問いに、ペトロは69～70節に記された信仰告白で応答します。この「神の聖者」は、マルコ1:24のみに記されている言葉で、イエスによって追い出される汚れた霊が叫んだ言葉ですから、信実の信仰告白として記されているものではないのです。この福音書のペトロは、イエスを神の子・キリストと告白できなかった人なのです。70節の「ところが」と訳した接続詞の直訳は「そして」です。また、71節の「…でありながら」は原文にはありません。新共同訳の訳文にはイスカリオテのユダだけが非難されるような方向性が色濃く出ていますが、著者が言いたいことはその逆ではないかと思うのです。著者は、離れ去った多くの弟子たちの中にもイエスを引き渡す行為・不信実な行為をする者たちがいるだろうし、そのことはペトロたち十二人においても言えるし、現に少なくともイスカリオテのユダはその一人だったということを、言いたいのです。ペトロが一所懸命に「決して離反しない」と言ってもイエスは全く評価していません。

このように考えてみますと、著者が著すイエスを中心とする共同体の姿が分かってきます。それは不誠実な人をなお誠実に信頼するイエスの姿です。イエスの弟子への信頼は弟子が裏切る自由を含んでいます。そのような無条件の愛こそが、相手の自由・信頼に応える自発的の行為を促します。根源的な罪をもつ私たちをイエスは信頼して、招いているのです。(2月28日説教)